

三重花菖蒲協会会員の花菖蒲だより



三重花菖蒲協会について

創立後約30年を迎える、三重県の津市を中心とした花菖蒲愛好家で組織された花菖蒲の協会です。現在会員は25名で、落合正明さんが会長を努めています。伊勢系を含む各種花菖蒲の栽培と研究を行っています。毎年、伊勢神宮の国華会が催す展示会に参加し、参道に約150鉢の花菖蒲を飾ります。7号鉢に2本植えの作りで、神域にふさわしい花容で参詣者をお迎えしています。また津市のサティの店舗でも花菖蒲の展示をし、市民に楽しんでいただいています。



魅せられて“花菖蒲”

三重県 伊藤 昭子

人生には、幾度か深いかわりを持つ事になる出会いがあります。

二十数年前の六月初旬、友人に誘われて、津市近郊の、伊勢花菖蒲園に出向いたのが、私と花菖蒲との出会いでした。

薫風渡る広大な花菖蒲園に、見渡す限り、今を盛りと咲き誇る花の見事さに、じんとするような感動を覚えた事を、昨日の事のように思い出すことができます。

足許を気にしながら、ひとつひとつの花の色、花びらの開いているさまなど、品種毎にそれぞれの表情を持つ花を觀賞しながら、見事なヴァリエーションと、優雅なネーミングに惹かれ、数株買い求めて、その時の説明通り、庭に地植えしました。二番花も楽しみましたがその後の手入れなど、栽培に関して、全く白紙状態だった私は、解らぬままに、次の年を迎えました。最初の年のような見事な花には出会えませんでした。ところが、三年目には、花も咲かないどころか株も小さくなり、いつの間にか庭の片隅で、忘れ去られて行きました。そんなある時、花菖蒲の栽培を趣味にしている夫の友人の紹介で、三重花菖蒲協会に入会させていただきました。あの美しい花に出会うための第一歩が始まりました。

会員の方達の熱心な指導に耳を傾け、情報を交

換し、鉢植えの手ほどきを受けました。株分けに始まり、ポット苗作り、鉢上げ、肥料、消毒など研修会を通して、栽培の奥深さ、むずかしさに気付かされ、軽い気持で、ノウハウも知らずに買い求めた事を、今は恥ずかしく思っています。

花菖蒲の歴史も、その祖先は遠く万葉に遡るとの事、イリス属植物には、ヨーロッパや中国原産のもの、ジャーマンアイリスやカキツバタ、アヤメ、ノハナショウブなども同属である事、江戸時代、大名に保護され改良を重ねて現在のように隆盛を見ている事など、色々勉強させていただく事もできました。

今、私達が出会っている優雅な花たちは、まさに日本の歴史と伝統を受け継いでいる、私たちの誇りであり、それを栽培できる事に私は、喜びを感じているこの頃です。六月が近づいてくると、今年はどうな花の顔(かんばせ)に出会えるかと、わくわくします。でも長雨で、大きな蕾が丸まったまま、開かなかつたり、開花期を迎えても、赤さび病にやられて満足に咲かなかつたり、幾度も悲しい思いもしていますが、その度毎に、来年こそはと、勇気やパワーももらっています。

六月の展示会では、幾度か賞を戴いて、励みにもなっていますし、毎年、伊勢神宮に奉納させていただき、参詣される方々に観ていただいている事も、生き甲斐になっているのかも知れません。私の人生に、大きな意味を持っている、この素敵な花との出会いを、貴重なものとして、大切にしていきたいと思っております。(2009年10月)



花菖蒲をこよなく愛しつづけて半生に

三重県 舟橋 保子

色々な植物を愛し育てる事を生き甲斐のひとつとして過ごして参りましたが、ふとした事から花菖蒲が三重の県花であり河芸町の花でもあります事を改めまして意識しまして花菖蒲に心を寄せ三重花菖蒲会の展示会に足を運び見学させてもらう機会に巡り合い咲き誇る花に心を奪われまして三重花菖蒲会に入会させていただきました。先ず品種の多いのにおどろきました。入会

させてもらい今まで 29 年たちました。毎年会員様同士の品種の交換をし乍ら育て今日では会員様への配布苗を作らせていただいております。

毎年六月には、会員皆様で伊勢神宮の境内参道かぐら殿に見事に咲きほこる花菖蒲を飾らせていただいております。ご参拝客の皆様のお心をお癒し、お慰みさせていただきます。

今年の会員皆様の日頃を競う展示会のお花の中、私の作柄を選んでいただきまして三重県知事賞をいただきまして 82 才と云う年老いた私の最高の喜びに満ち溢れました。

亦今日改めまして植物花菖蒲が私に与えて呉れる最高の疲れ、病気知らずの身体に感謝いたし喜んで居ります。いつまでもお花作りをさせていただきます事を。

落合会長様始め会員の皆様のお助けを戴き、生き甲斐の花菖蒲と共に余生を、と思えます。三重花菖蒲の益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。



無手勝流花菖蒲栽培記

三重県 米倉 靖夫

我が家の花菖蒲栽培は、先代が神奈川県の大船に転勤した時に始まる。当時隣人は植物栽培が趣味で、バラ・サボテン・花菖蒲などの栽培を手掛けていた。

花菖蒲は、大船植物園より入手していたと思われる、先代はそれを株分けして貰っていたのではなからうか。主な銘柄は、石橋・不知火(肥後)・島影(?)・七福神(江戸)・東鹿の子・児化粧・日本海・夏姿(伊藤氏作出)・舞子の浜・名称不明の花 1 種等が残っていた。主を失った花木は細々と庭に打ち置かれていたが、花菖蒲はなんとなく県花と言うこともあり、なじみがでて栽培する気が起き、自己流の花菖蒲栽培を始めた。

先代は 8 号位の素焼き鉢に植え込み夏場はトロ箱に浅く水を張って、育てて居た様に思う。引き継いだからには、そんなトロいことでなく大きな花を咲かせてやろうと意気込んで、大きめのプラスチック鉢に元肥を入れ赤王土・鹿沼土などを混ぜた土で育てたが翌年になっての植え替えどきには、殆ど根は張らずやっと生きてますと言う状態になってしまった。

僅かに大きな鉢にしたことが完全に枯れるのを防いだものと思われる。特に元肥として有機肥

料を多目にしたのは、水切れを恐れて鉢受けにボールを使用していたこともあり、腐敗が激しくなり 根腐れして枯らす結果となってしまった。

それではとばかりに腐れ止めに石灰石や炭化鶏糞などを加えたり、ピートモスバーミュキュライトなども試してみたが、それにより直ぐに悪影響がでると言うこともなかったけれども、好成绩を得られることもなかった。

結局欲を搔かないで、其の年の最初の植え替えには大きな花や株よりも枯死を避けることを第一にし、砂気が多い特に有機物の少ない土のみ使い有機系肥料を施すときには根よりは出来るだけ離し上方に配する様にした。また有機肥料を施したときには、植え替え後 3 週間乃至 1 ヶ月後にガス抜きのためつもりで鉢の縁に沿って棒又はへらの様なもので隙間を空けている。また連作すると土は嫌気されるので毎年新しいものに取り替えるように勧められるが、住宅地の狭い庭内で 300 鉢近くを毎年新しい土に替えるのはスペース、労力、材料 などの点からも難しいので、使いまわしで、うまく育てることを試さざるを得ない。そこで、毎年若干異なったアレンジをしながら試す中で旨く行くかどうかは賭けの状態だ、しかしすべての鉢を画一的に同じにするとひとつ間違えば全滅という恐れもあるので土・水やりなど若干違いを持たせている。最初の植え替えは夏の盛りにはボツボツ行い 8 月下旬から 9 月上旬に集中して完了するようにしている。又根や葉は出来るだけ残すようにし、10 月の半ばから 11 月の初めにかけて、銘柄毎に複数鉢ずつ植え付けてあるので其のうち一鉢を 7 号鉢か 8 号鉢に植え替える。

(花の大きさと鉢を選択)。新しい銘柄の株を入手したときは、すぐに鉢植えにはせず先ず露地植えにして根付いた後、株分れしたものを鉢に植えるようにしている。冬入りして葉が枯れ始めてから土より 4~5 センチ上で切り、切り株に少し隙を持たせて巻いておく、このように色々手を掛けても結局ベースの土に肥気が少ない為か、はたまた庭木に起因する日照不足のためか、他の人のものと較べると細身で花の時期を迎えてしまっている、あまり参考にならない栽培の仕方かとおもうが、しかし花茎の細さにもかかわらずそこそこの大きさの花が咲いていると思うのは鼻真目だろうか。